

淨土



蓮久

七月號

平和の鳩

隣國の動亂もやがて平和の鳩が訪れようとしてゐる。鳩はいかにも平和な感じのする鳥である。……しかし、

その古昔、神は人間の邪惡なるを憎み、大洪水を發して之を根絶し、ただ一人の善人ノアとその家族及び動物達を方舟に救わしめた。

ノア達は洪水の退くまで大水の上を漂い、水の退いたかどうかをためすために一羽の鳩を放つた。やがて、鳩は水が退いたと見えて歸らず、彼等も安心して方舟を出、再生の天地に、その生を營み繁榮したのであるという。世界中の人が邪惡なりとはいへその人々の殺害の上に飛ぶ平和を告げる鳩である。

西洋の單なる一傳説ではあるが、このような鳩ならば御免である。無事の民に戦火のローラーを苛責なくかけておいて、鳩を放つて平和だとか、原爆を落して、ノーモアでは困るのである。

西洋的なものの見方には深い人道主義を見ると共に、冷酷な罰の思想に突き當る。我々の信仰は、マイルドな（柔和な）インド、東洋の中に育つた恩讐を越え、殺害の門を通らない平和の道を行く。

非業の死を遂げた幾萬の人々にも訪れるうら盆に際し、我々の心からなる眞の平和の鳩を放ちたい。

浄土 七月號 目次

立葵の咲くころ……………吉田絃二郎(1)

慈雲尊者の十善法語……………眞野正順(4)

おぼん……………伊藤宏天(11)

おぼん風景……………竹田聰洲(22)
牧田諦亮外

古寺訪問 釜寺と厨子王丸……………(29)

開教物語 ハワイ開教の思い出……………佐山學順(8)

一枚起請文……………佐藤賢順(15)

思いつくまゝに……………武田泰淳(26)

話天風號のみたままつり……………齋藤良光(30)

幽霊芝居……………梅津和夫(20)

立葵の咲くころ



吉 田 絃 二 郎

白いエゴの花が散るころになつた。エゴの花は地味な花で、かへり見る人もないほどであるが、初夏の武蔵野を歩む者にとつてはなつかしい花である。

學生時代にわたくしは目黒のあたりを歩いてゐた。まだ目黒あたりはさびしい田舎であつた。わたくしは美しい流れに沿うて歩きながら、そこに手折つたまゝ捨てられてあるエゴの花を見出した。わたくしはエゴの花を美しい小川に流してやつた。

二三年前のことであつた、わたくしは武蔵野を歩いてゐて、道ばたに捨てられたエゴの花を見出したことがあつた。しかしわたくしはそのまゝ通りすぎてしまつた。

わたくしは四十餘年の昔の、若い日の美しい心と現在のかたくなゝ心とを比べてさびしい氣になつた。

今年も亦エゴの花が咲き、散つてゆく。

わたくしは學生時代の心と老いの日の心を一つの胸に

感じながら武藏野を歩む。

麦の秋の、武藏野にはまだ郭公を聴くことができる。

郭公は武藏野が青く煙り、すこし冷え冷えとした微風の吹く日に鳴く。

郭公と前後して毎年筒鳥が鳴く。筒鳥はいつの年も三四日くらゐかすかな聲を聴かせるだけである。

武藏野に住むやうになつてから二十餘年、初夏になると心ある人に筒鳥を聴いてもらひたいと思ふが、何分にも一日にほんのわづかの聲であり、かすかな聲なのでまだ誰れにも聴いてもらふことができなかった。

ところが、今年初夏の一日市川三舛氏が見えたので筒鳥の話をしてゐると、近くの木立で縹渺たる筒鳥の聲が聞えるのであつた。

偶然のことと言つてしまへばそれだけのことであるがまことにありがたい偶然である。

たくしたちは、釋尊前に生まれて死んで行つた人たちに比べて幾十倍のめぐまれた偶然をあたへられてゐるといはなければならぬ。しかし釋尊の御聲は筒鳥のそれよりも幽玄である。心の耳を澄まして聴かなければ聞えはしないであらう。

エゴの花の散るところになれば武藏野の小徑を歩くに蟻の群が多いので困る。人の影もなく、高鳴きする雲雀の聲を聴きながら歩いてゐると靴先に踏まれんばかりにして駆けまはつてゐる蟻に氣付く。かれらは寸秒の時間を惜しんで穴を出で、穴に駆けこんでゆく。この蟻を踏み殺すまいと思ふのに一苦勞する。

わたくしはこのごろラフカディオ・ハーンの「蟻」についての隨筆を読んだ。ハーンは英國の哲學者スペンサーの蟻の研究を根據にして話をすゝめてゐる。スペンサーにしたがへば「利己主義と愛他主義とは後此の差別的

ないまでに融和された社會が、一突進の人類社會の姿でなければならぬが、この理想郷が蟻の仲間では幾百萬年前から完全に實現されてゐるといふのである。

蟻は園藝や農業をいとなみ、五百八十四種の動物を飼育してゐること、近づいて来る悪天候の猛威から子供たちの安全を計る方法を知つてゐること、蟻は非常に長命であること、正しい禮節、きびしい倫理を守ること、綺麗好きであり一日に幾度となく頭に手をやつて身だしなみを怠らないことなどを書いてある。

蟻の社會では種の保存のために必要なわづかな男が存在するだけで、他はみんな女である勞働する蟻、餌をはこぶ蟻、食糧保存のために化學的作業を司る蟻も、外敵を防ぐ軍蟻も女である。これらの勞働蟻や軍蟻の子供を育て上げるために保姆がつけられてゐる。保姆たちは子供たちを育て、ゆくために必要な換氣、消毒、排水のこ

とまでも心得てゐる。

以上ハーンの隨筆から一部分を採録したに過ぎないが、わたくしはハーンの物を讀んで以來、一層蟻を踏むことを恐れるやうになつた。

雨に濡れて武藏野を歩いてゐる時、家のなかゝら駆け出して來て傘を貸してくれた若い女があつた。立葵が咲いてゐる家であつた。

また或る日雨に降られて武藏野を歩いてゐる時傘を貸してくれた尙う一人の若い女があつた。山査子の花が咲いた家であつた。

今年も立葵の花が咲いた。わたしは妻を亡つた若い男が悄然としてその家の前に立つてゐるのを見た。

今年も山査子の花が咲いた。わたしはその家でも亦いつもこのごろ若い男が愁然としてたゞ獨り夕暮の戸にたゞすんでゐるのを見た。



慈雲尊者の

十善法語(一)

眞野正順

これからお話しようとする「十善法語」は、有名な葛城の慈雲尊者の作であります。慈雲尊者が亡くなられてから今年でちょうど百五十年目になりますが、いま河内の高貴寺には、その木像が残っております。そのお顔の頬には生なまのまゝの白い髯が一面に植えつけられてありますが、それは、尊者を敬慕してやまぬ弟子達が、尊者の剃り落した髯を捨ててに忍びず、一本一本を拾ひあげて、丁寧にその木像に植えつけたものでありまして、それだけ、人々の敬慕の念の如何に篤かつたかを語るものであります。生きておられる内から、大勢の者に「生ける小釋迦」と堅く信ぜられていたのです。

非常に驚れた方でありまして、學問上でも驚くべき世界

的な行蹟が残されておりますが、殊に力を注がれた事は、佛教を釋尊の生ける昔に返し、その眞實なる道によつて、この社會を貫き民衆を導かうとする強い念願でありました。この「十善法語」はつまりその結晶であります。十善——十の善き事によつて、人間本然の道を説かんとしたものでまたの名を「人となる道」とも呼んでいます。尊者御自身も非常な抱負を之に持つておられた様で、「我を知るものは十善法語、我を罪するものも、また十善法語」、わが生涯の精神はこの一書の中に打込まれてゐると斷言されております。其抱負にたがわず、いかにも尊者らしい豪快な口調で、きつぱり／＼平易簡明に述べられつゝ、深い含蓄をもつてゐる。まことに名文であります。

ところが、残念な事には、今日迄この本はあまり流布して居りません。まだ明治の初め頃は、行誡上人などの努力に依り多少知られて居た様ですが、近來はほとんど忘れられたかの如くであります。非常に良い本で、殊に其考が如何にも近代的なので、何とかしてこの良書を世に紹介したいと思ひます。



(高貴寺の尊者木像)

人となる道、それを、この生の人間のたゞ中に求められたのが、尊者の特色であります。

「人となる道、この人と共に云ふべし。……」

この人あつて、この道有る。外に向つて求める事ではない。この大人あつて、この十善の道を全うする。今新らたに構造する事ではない。人々具足、物々自爾、法として如是じや。たゞ迷ふ者が迷ふ、知らぬ者が知らぬばかりじや」人の人となる道は、この人の中に具はる。外から探し出して來ることはない。外から探し出して來ねばならぬ様なら、本當の人の道とは云へないであろう。人の道は、人生身にぢかに尋ねられるべきものである。人が人として其の本性を遂げること、その外に人の生甲斐は有る筈は無い。また喜びもある筈はない。

それならば、人の眞の本性は何であるか。人間の本性は純なものである。實を云へば、悉く皆、宇宙眞實の根元から直接に流れ出ている。これを「清淨法性の等流」といふ。

夫は譬へば、ヒマラヤの頂に、千古の緑を深く湛えた湖から、流れ流れて廣漠たるインド平原の草や木を潤すに似ている。草木は悉く水の潤ひに依て生きている。その色・

形はさまざまに異り亂れてゐるけれども、全ては水の潤を基とし、水の潤を現したもので無いものはない。その様に一切の生きとし生けるものは、みな純なる宇宙本質の現はれで無いものはない。殊に人間はその最も優れた表現である。従つて、その營む社會一切の資生産業、いづれも皆な本質の輝きならざるは無い。

それ故、人の眞實の生き方と云つても、別に不思議がある筈はない。たゞ此の内なる純の本質のごとく生きる。その流れゆく姿のごとく生きる。すべてを「法」の如く生かして行く事の外にはない。この流に順ふのが善である。よくその性質を現すからである。流に逆らふのが惡である。その本然を妨げるからである。——そこで尊者は——

『理に順つて心を起すと善と云ひ、乖背するを惡と名く。

……理に順ずるとは別の事ではない。自らの本性通り、少しも増減なき事ぢや、本性に身に意相應すれば十善自ら全きじや。理に背くと云ふも、別の事ではない。たゞ是の私意ぢや。私意で本性を増減するが、謂ゆる惡ぢや。善は常に佛性に順する、惡は常に佛性に背くじや。』

本性を妨げるものは私心である。本來廣く悠々たる本

性を我身に狭く限つて生きる私心である。本來に歸るためにはこの私心を捨てねばならぬ。

然し考へて見ると、事は口に言へる程簡單なものではありません。人の本性と云つても、それが別に目に見える姿で出てくる譯ではない。現實の世界は、すべて個々別々の狭い對立の姿でありまして、皆んなそれぞれ狭い範圍制限の中に縛られてあがいている。

『雲の空中に起滅する、たゞ風に隨つて、自ら自由の分はない。面白きことじや。草木の地上に榮枯ある。たゞ風・日、霜、露に順つて自ら自由の分はない。面白き事じや。眼は自ら眼を見る事はならぬ。色に對して眼の用がある。耳は自ら耳ならぬ。聲に對して耳の用がある。……悉くたゞ衆縁和合のみにて、自ら自由の分なきじや。心に自ら心ならぬ。外の善惡邪正、是非得失に對して心の用がある。悉くたゞ衆縁和合のみにて、その實體なく、その主宰なく、朝から暮に至るまでたゞ業相に役使せられて、自ら自由の分なし。……面白きことじや』

この様に、世界に現はるゝものの、皆悉く制限の中にあ

つて、自由の分はない。人間もまたこゝに生ける限り、また制限の中にあつて、制限に生きるより外、致方がない。従つて、どうしても夫れに囚はれる。私心わたくしこころに生きるのは悩みの基と知りながら、どうしても是の私わたくしを中心として生きて行かねばならず。其の限り必ず「私」に囚はれてゆく。

『佛と異ならぬ心を持ちながら、自ら迷ふて些々たる業相の姿を構へて、その中に頭出頭没し、こゝに死しては彼に生じ、業風に吹飛ばされて、暫くも定かならぬじや。一切時、一切處に、生もなく滅もなき場所に、自ら生死を構へて種々顛倒するじや。彼もなく此もなき一切平等の場所に其處にへぎりこゝを拵へ、此處にへだてこゝを設けて、自ら窮屈に入るじや。いまこの三界皆是我有わたくしもの、其中衆生悉是吾子みなわたくしの子なるに、その子共が互にいさかいせりあいするじや。甚しきに至つては、人たる道に違ふたが。自己心中に大安樂の有るを知らずに従ふておるじや』

然らば、どうしたらよいのか。

(つづく)

淨土俳壇

梅雨の海しすかにぬれる岩を訪う 東京 戸野倉砂城

蓮見舟陸路の友に遅れ着く 岩國 長岡白朝居

蓮を見てより古寺へ廻る筈 同

またもとの道に戻りて蓮を見る 同

滴りも縁に染まりたるかとも 葉山 河合嵯峨

はてしなく磴あり深緑おそろしき 同

子等散つて灯影にしづむ金魚かな 埼玉 蓮ヶ谷由紀子

花うつぎ山の小徑を連れ立ちて 鎌倉 佐藤初潮

大茂り玄關深く閉ざし居り 同

一山を庭として住み谷若葉 同 淡路鳴江

この庭の廣さに歩く花みかん 同

此の庭を領して夏の館かな 選者

花うつぎ鎌倉山に多きかな

大いなる館薄暑のひとときを

選者 高木晴子

ハワイ開教の思出

佐山學順



戦争に依つて浄土の開教事業は、潰滅の悲運に會つた。たゞ現在、一時的閉鎖から再生した唯一の開教區は、アメリカ開教區のみである。明治四十五年より大正十二年まで開教使として、布哇ホノルル市、ヒロ市、ラウパホエホエに駐在した私は、開教の思出に、微笑を禁じ得ざる老人の喜びがある。

恰も第六代開教使長福田正師は自坊愛知縣布袋町善光寺に於て本年四月廿三日正念往生、又太田邦雄師夫妻が廿五年ぶりに歸休されたを機會として開教の思出を發表し、何時かは復活の機會もあらむ本宗開教の奨励にでもなれば幸である。

浄土宗の布哇開教は六十年前に遡る、布哇移民は明治十八年に初まつて、安藝門徒を主として山口、福岡、熊本縣人が多い。従つて西本願寺の地盤である。それなのに十數ヶ處の本宗教會堂が出来た事は、一には開教の先鞭を附けた事、即ち西本願寺の開教に先だつ事三年である。私の居つたラウパホエホエ教會などは教線區内に四百軒程の在留民なのに浄土門徒は十指に足らず、然るに、後から建立したる隣耕地の本願寺布教を壓して居た。眞宗門徒でも、葬式法事は、本宗開教使も同席する。教區に列するものは恰も眞宗門徒で

あつた。開教の先驅といふ事は、大なる勢力である。それに、開教の功績は山口佛教の獻身的努力と共に、山口佛教徒、特に大島郡浄土門徒の熱心ある外護の賜である。

明治廿七年山口出身の白石堯海、道重信教兩師の首唱と荻原雲台上人等の應援によつて布哇宣教會が成立し、浄土宗特派開教使として、松尾諱定師を派し布哇全島を視察せしめた。當時浄土一宗の財政は、貧弱にして一宗開教の出費の途なく、有志の獻金によつて、岡部學應師をして開教の火蓋を切つた。岡部師は先づ有縁として山口浄土宗門徒を訪ね、マウイ島より布哇島ヒロ市、ハカラウを巡察してハマクワに一寺建立を果された、佛像を背負ふて、同郷有縁の信徒に頼み、明治廿九年一月布哇浄土宗最初の伽藍、恐らくは布哇八島に佛教殿堂が建立された嚆矢である事を誇りとするものである。田中摩許衍、池田常念、吉田良雄、日向實英、荒操天、山中寛隆榮久庵鐵然の諸師は歴代上人、現在は榮久庵光丸が主任である。

明治卅二年浄土宗會に於て、布哇開教區新設案が提出され、白石師は、布哇宣教會の組織當時から開教の急務を説いた。其熱意、先見の明に感動して、新案は通過し慶賀の報

なつて布哇開教區が生れた事である。布哇開教が公認さるゝや、八壽田大定師、第二の議會たる布哇島ラウバホエホエ教會堂の建立、伊藤圓定師オーラウに、安西義信師コハラ、カバアウに、教會建立となつた。教勢次第に擧がり教線全島に普及するに及び、これが統一の必要上、明治卅六年三月、初代使長清水信順師を迎へラウバホエホエ教會堂に教務所を置き首府ホノルル開教院の建立となり、ホノルルを本部所在地と定めた。伊藤圓定師これを續ぎ明治四十年十一月ホノルル淨土宗開教院の殿堂二階建七間四面、當時各宗中第一の本堂であつた。久家慈光、立川眞教、井上照眞、福田關正、窪川旭丈の各師を経て現使長宮本文哲師に至つた。

使長制になつてから開教使と設立教會は明治卅七年、相馬千里師は布哇島ハカラウに、同卅八年、小林了秀師は布哇島ワイナクに、鈴木應善師は、同じく布哇島ハブイに、清水觀碩師、布哇の第二の都會ヒロ市に明照院を明治四十三年原聖道師馬哇島ブウネネに、同年、室山實靜師はカワイ島ユロアに、同四十五年、齋藤原道師は、マウイ島ラハイナに、原田玄徹師はカワイ島カバアに、室山實靜師オアフ島ハレイワに二度目の寺、太田秀山師

マウイのワイルフに大正三年、又同六年島田隆道師はオアフ島エバに、各教會を新設して總數十七教會を見るに到つた。

布哇開教の先鞭者の献身的奉仕は、涙ぐましくものがあつた。日々の生活費は自辨である。開教使は赤手空拳である。同縣人や有縁の家に食を乞ふか、都合によつては一日一食の事もあつたといふ。岡部學應師は、有縁の地を轉々とした。笈摺姿の岡部師は布哇のハマクワに布哇最初の教會を建立した。其苦心は察すべきものがある。開教以來十數年を過ぎた明治四十年以後でも、食ふや食はずの開教に感激したものは、清水觀碩、原聖道、室山實靜諸師の奮闘史である。清水師はキャン廻りに少額の布施を得て、米代とし毎日一食は有縁の家を尋ねて食を乞ふ事にして居た。大正二年ホノルル駐在の私が、ヒロ明照院に清水師を訪問した。米はなし金はなし着早々近所の信徒の家に連れ行き、食を乞ふた時は私もいやな思ひをした事である。そんなに、衣食に窮し乍らの開教の聖行に涙ぐんだ事である。清水師曰く、時々信徒の家に行くと其家の子供が「かあちゃん、坊さんが御飯、食べに來たよ」流石の清水君も、いやになつたといふ。清水師に「五錢坊さん」といふ綽名

がある。ヒロ明照院の建て立ての爲めに、一日五錢づつ、お賽銭の積りで寄附して貰ひたい、然して其五錢を受くる爲め、風の日も、雨の夜も嫌はず、三ヶ年間集め廻りたる結晶が堂々七間八間の本堂である。原聖道師も、きかん氣の九州男子の代表的雄辯家を自負する同師は、馬哇島ブウネネの地をトし、各キャンブの街頭戦術を取つた。他教派の罵聲、石を投げられた事も再三あつたといふ。

室山實靜師も貧乏和尚で通つて居た、加哇島のコロアに一字を建立して足れりとせず、私の着任の頃は、オアフ島ハレイワに第二の開教の最中であつた。私も一二ヶ月手傳つた事であるが、食事は毎日の様に、信徒を廻つて食はして貰ふ。時間外に行くと、食へそこなつて、まゝよ水を飲んで寝た事もある。奮闘一ヶ年、遂に、宏莊なるホテルを手に入れ、ハレイワ教會堂及び附屬大正學校の完成を見て、宮本文哲師後任となつて布哇稀に見る堂々たる教會堂である。

寺と共に附屬小學校を經營して、教家の使命を果たすと共に、經營上にも樂になつた。ホノルルの布哇女學校を初めとして、ヒロの實踐女學校、其他十餘ヶ處の教會附屬校があ

つた。戦争中は開教師は殆んど米本土に抑留され勿論日本語學校は、閉鎖の悲運に會つたが、現在、數ヶ處の日本語學校が復活して居る。

自分の事をいふとおかしいが、明治四十五年ホノルルに着任して開教院駐在開教師布哇女學校教頭として、毎日授業に出て、月給は僅に七弗五十仙(日本金十五圓)、其後ヒロ實踐女學校長となつて月給夫婦で十五弗、買つて居た、開教といふ聖職感と先輩の謝乏生活を知つて居たから、不平不満は毛頭もない、扶養家族のないものは存氣でもある。

歴代使長としては、深川雲巖寺の住職となつた清水信順師、伊藤圓定師より久家慈光師立川眞教師、井上照眞師福田正師、窪川旭丈師、そして現任の宮本文哲師である。特に開教の功勞者としては快僧伊藤圓定師、衆目の見る所である。而して次ぎは福田正師である。伊藤上人は明治卅三年渡島してオオラウに教會堂を建て、日本語學校を創設した。

布哇全島の首府たるホノルルの開教に志しかアカコサウス街に本部淨土宗開教院を完成したのは明治四十年であつた。續いて布哇女學校を創設して宗教々育の先鞭をつけ、特に永井蓮有尼、廣瀬定源尼、五十嵐教山尼(後の

帆足夫人)桑山續音尼を招聘して教育事業に携はらせた事は異彩であつた。外は街頭傳道に、何時も數百人の聴衆を得て在留邦人の人氣的となつた。五十嵐教山尼と私が前席をつとめた事である。お蔭様で私の傳道熱が高まつた事を感謝して居る。

福田正師は、昭和二年八月、滿州長春寺より就任さる、同師によつて財團法人布哇淨土宗教團として米政府の認可を得て、布哇淨土宗の基礎を確立した、更に、昭和三年六月廿七日、ホノルル市アキキ街に、十一萬呎の敷地と建坪十三棟とを大英斷を以て買收し、同六年には、三階建鐵筋コンクリートの大伽藍の新築、大食堂其他一棟の新築舊家屋十二棟の大修繕、テニスコートの新設、昭和七年六月、内外人無慮七千人の參集を得て、入佛慶讃大法會を修した。かくして布哇淨土宗が多年の願望は、福田監督によりて完成したのである。現地は、ホノルル市の中央に位し、嚴然たる殿堂と、その境内は布哇佛教界の誇りとするもので、戦時事、官憲に没收の悲運に遇つたが、現在は返還をうけて、教會と育英事業に新監督宮本文哲師が精進して居らる。

。現下の問題は、英語傳道である、佛教が世界佛教であるかぎり、白人傳道も豫定すべき

きである。十萬の佛教僧侶が、白人傳道に従事し得るもの果して幾人ありや、内地に求むるとしたら鈴木大拙氏か、ブリンクリー氏位なものである。若い人に英語が出来るとしても、佛教の思想に淺く、それだけの抱負もない。今米國に於て、日本人として白人傳道をやつて居る特志家は、開教使でなくて、一勞働者として行つた千崎如玄師位なものである。

布哇に於て、日本より移民した第一世は五分の一である。五分の四は布哇生れの所謂日系米市民である。それは日本語よりも、英語の方が解り易い。茲に英語傳道師の要求が當然である。今新しい試として日本よりの英語傳道の卵を養成しつつあるが、經濟上何人もといふは不可能である。然し布哇開教の永續を豫定するかぎり、何とかせねばならぬ。これは、廣くは日本佛教の豫定事實であると共に宗門の將來を思ふ時、宗侶の考ふべき問題である。

昭和廿八年度の淨土宗會に於て、北海道開教に關する請願が採擇された。開教は先鞭者に得點がある。一日を争ふ問題である。宗祖の御遺志に當り記念事業として豫定さるべきであらう。



おはん

伊藤 宏 天

七月十五日を中心とした盂蘭盆の行事に就いて、各地に於ける傳統と風習とは區々であるが、正月元旦と並んで是れを「中元」と云い、挨拶、贈答、御祝儀の社會儀禮と一般化し、更に「盆おどり」となつては季節向き催しもの云う感じが強く出て来るが、然し、謂ゆる「お盆」につきものは、お墓参り、お施餓鬼、棚經で有ろう。是れ即ち「お盆」の由來因縁が盂蘭經をもととして、七世及び現世の亡父母の爲に百味の飲食五菓等を具し、懸繒燃燈して十方の佛僧に供養し、以て彼等の倒懸の苦を救い、併せて其の大神恩に報答せんとするのが重點とされて居るからである。

既に周知の通り、盂蘭盆經の興起は佛弟子目連が神通を得て、亡母の居所を求めて餓鬼道に悩めるを見、即座に此れを救わんと欲するに、目連の神通を以ても及ばず、即ち佛所に走つて救済を乞う。佛、爲に説いて曰く「七月十五日僧自恣の時……云々」と云うのである。

此の盂蘭盆經の所説を實話と見るか説話と見るか。傳道教としての佛教は謂ゆる托事辨で、説話で教導することが多い。實話であつてこそ有難いのに、説話なんて作り話じ

や一向に値うちが無いと思う人が有るかも知れぬが、「物を見たら理を悟れ」で、たゞのものと見る所に間違ひが起る。どんな物にも道理が含まれて居る。寧ろ、理を理で説くより、物に托して理を教えた方がらくな場合が多い。

私は今暫らく、此の經に内藏されて居る佛教の理の面を考察して見たい。第一に七月十五日僧自恣の時である。佛歡喜の日とも云われて居る。七月十五日は初期佛教教團の制規として、衆僧が安居と云つて九十日間の雨期を一所に共住し、専ら思索と研究とに勤めた最終の日で、茲に一年を終つた形で次の日から遊行即ち新しく傳道の旅に出るので、比丘達に取つては越年、新歳と云う感が深いわけである。

偕て自恣の語を辭典に質すと、満足または喜悅の義、隨意事とも譯す。安居竟るの日、僧をして自己の罪過を説かしめ、懺悔清淨にして自ら喜悅を生ずるを云うと。私は遙かに初期佛教に於ける比丘達の眞摯さを想像して、心のほのかに温まる思いがする。

次に盂蘭盆の字義であるが譯して「倒懸」と云う。即ち

盂蘭盆を修することは倒懸の苦を救うと云うのである。其の事例を餓鬼道に取り、配するに弟子目連と其の母とを以てする、此れが一經の構想である。惟うに目連は弟子中でも人一倍母思いであつたので有ろう。而も其の母が人一倍慳貪邪見であつたとして見ると、其の死後までが思いやられたに違い無い。此の經の疏に其れらしいことが見られるので有るが、私は幼い頃、何でも「修行者に供養せよとて托された物を、誰も知らぬからとて自分に使つてすまして居た」とか聞かされて、其れが餓鬼道へ落ちた原因で、倒懸の苦を受けるわけかと感心したものである。さか立ちの藝當なら時の戯れであるが、年中足が上で頭を下に吊られて居ては苦しいに違いない。公のため道のため、はげみつとむるが修行者である。其の修行者に施すべきを私に使用した。公と私、施さずして横取りした。たしかに逆でありさかさまである。刹那の逸樂を求めて永劫の苦に悩む。何だか人ごとで無いような氣がして來た。「倒懸のもととは倒見に在り」として見たら何うなるか。向阿上人の父子相迎の中に「倒見目をくるめかし」とて、常樂我淨の四顛倒の妄見をねんごろに誡めてある。更に五濁説の中に「見濁」と云うのが有り、了見違い感違いで、五濁増と云うから捨て、置けば其うした誤が殖える一方だと云うのである。正見を尊ぶ佛教では色々にして邪見を誡める。其の第一を「身見」と云い自我身見である。此の身體を自分のものと

思い我がからだと思ひ込む誤である。其れがもとになつて世間で云うように、仕事は大勢でする方がらくだし、うまいものは小勢で食う方がとくだと、得手勝手な主張をするように成る。これを邊見と云う。即ち第二苦樂の兩邊見で斯くて第三顛倒の邪見はつのり、たまたま小善を爲しては我見取見で、して上げた、してやつたと恩に着せ恩を賣るようになる。これが第四で遂には神佛を向うに廻して無理難題をふつかけるような第五の戒禁取見と成るのである。其の根本は自我身見で、殊に此の身體を第一に取り上げてある所が嬉しい。世間往々にして佛教を唯心論であるかの如く誤解して居るが、五五の本生譚が皆其の最後を自身施、捨身、自身供養で結んで居るので解るように、眞の佛教は此の身體の扱い方に就いても十二分の指導をなすものである。目連の母は身見の執着がひどかつたために、施すべきを私用して年中倒懸の苦に悩まされて居た。因既に倒見の故に果も又倒懸と云う。其が救済教導のために行われたのが供養であり施行であつた。特に現在の亡父母七世の父母の拔苦得脱のためにと云うのである。而も七月十五日僧自恣の時と云うのであるから行き届いて居る。反省の日、懺悔の日である。お互いに反省することが大事である。我が身と思うではない。頼んで産んで貰つたわけでも無く、頑張つて生れ出た覚えも無い。何うして我が身と云われよう。父母のさかばい先祖のさかばい、身は是れ大恩の

結晶と心がけるが正見で、報恩のためにと勤めたのが盆行で、譯して救倒懸苦と云う。自からの倒見を改むることに依つて七世の父母の倒懸を救うことが出来たのである。「亡き人を弔うまことの道は残れる者の正しき歩みによる」と云うのが年來の私の主張である。今年も既にお盆の月と成つた。一段と強く自恣のすがたを明らかにして、自身供養と奉仕の行にいそしみ度い。

舊七月十五日、月はまんまるお盆のように圓かろう。月に兎が餅を搗くと云う。月の兎の傳説にからんで、まことに立派な本生譚がある。良寛和尚の長歌を借りて紹介しよう。

月の兎

良寛

天雲の　　むか伏すきはみ
 たにぐくの　さ渡るかぎり
 國はしも　さはに有れども
 里はしも　數多あれども
 御佛の　生れます國の
 あきかたの　其の古の
 事なりき　猿と兎と
 狐とが　言をかはして
 朝には　野山にかけり
 夕には　林に歸り
 かくしつゝ　年のへぬれば

ひさがたの　きこしめし
 しらさんと　あしびきの
 なづみ行き　給へとて
 憩ひしに　ほづえより
 まゐらせり　あたりより
 來りたり　走れども
 有りしかば　もとなしと
 はかなしや　たまくらく
 折りて來よ　焚きてたべ
 なしつれば　あたらしを
 なしにけり　見るからに
 こひまろび　天を仰ぎて

旅人となりて　山行き野行き
 をし物あらば　尾花折り伏せ
 猿は林の　木の實をつみて
 狐はやなの　魚をくはへて
 兎は野べを　何もえせず
 いましは心　戒めければ
 兎うからを　猿は柴を
 狐は其れを　まけのまにまに
 炎に投げて　旅人のにへと
 旅人はこれ　しなひうらぶれ

よゝと泣き
 やゝありて
 申すらく
 友だちに
 いはねども
 愛ぐしとて
 身をなして
 ひさがたの
 かき分けて
 葬りける
 つがの木の
 語りつぎ
 ひさがたの
 言ふことは
 ありけりと
 白たへの
 とほりて濡れぬ。

土にたふれて
 土うちたゝき
 いまし三人の
 勝ち劣りを
 我れは兎を
 元の姿に
 からを抱へて
 天つみ空を
 月の宮にぞ
 しかしよりして
 いやつぎつぎに
 言ひつぎ來り
 月の兎と
 それが由にて
 聞く我れさへに
 衣の袖は

私は嘗て名優の演出で、良寛が此の物語りを子供達に聞かして居る舞臺を東京の歌舞伎座で見たことがあるが、今に忘れぬ強い印象が残つて居る。

今年も舊七月十五日、盆燈籠のかげから中天の淨満月をおがみつゝ、この良寛の長歌を繰り返し味つて見たい。我が倒見を正さんため諸人の倒懸の苦を除かんがために。(完)

毛ぬいの「まんだら」

多分、今から四十餘年程前の事であろう。法然上人七百年御忌を記念するため、全國の信徒の信仰を結集して、宗祖への報恩を企畫した人があつた。

それは、一布教師清水賢善師(川越、蓮馨寺住職)で、師は全國行脚の折々に、宗祖の徳を稱へ、淨土の教を説き、その信仰の現はれとして、「毛ぬいの淨土まんだら」を製作する企畫を思いついた。女性信者の一人々々より、頭髮三本を頂き、この毛で「まんだら」を織ろうと言うのである。

信者の熱心な讃仰は、たちまちこの事を成就に導き、無數の毛が集められた。清水師は、早速これを職人に依頼し、絹地に淨土まんだらの下繪を書き、その上を細かく頭髮で刺繡してもらつた。

世にも珍らしい見事な「まんだら」が出来あがつた。宮家の豪貴があり各界の人々は、その信仰結果の偉大さと、「まんだら」の立派さに驚いた。そしてそれは、増上寺に寄贈された。不幸にして震災にあつたこの「まんだら」は、煙と共に、その事實さへも、この世から消え失せようとしている。

まんだらにからむ種々の物語りは、古來色々ある。又本願寺の毛綱も、忘れ得ぬ昔語りである。それと共に、このまんだらの話も、耳底に留めておいて欲しい。

七百五十年遠忌も近いこのごろ、町で拾つた時節にふさはしい語り草であらう。



一枚起請文

佐藤賢順

たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申し
て疑なく往生するぞと思ひとりて申すほかには
別の仔細候わず、たゞし三心四修と申すことの
候は、みな決定して南無阿彌陀佛にて往生する
ぞとおもううちにこもり候なり、このほかに奥
深きことを存ぜば二尊のあわれみにはずれ本願
にもれ候べし。

この一段は三つの文章から構成されていますが、そのうち初めの一句が最も大切でありまして、これは一枚起請文全體の眼目であります。この一句だけでも淨土教信仰の心髓を言い盡して餘りなしといつてもよいほどであります。

極樂に生れるには佛の本願を深く信じて南無阿彌陀佛と稱えるだけでこと足りるのである、この他の面倒な理屈はみなこの南無阿彌陀佛に含まれている、それなのに念佛だけでは物足らず、何かほかのことを行わなければ往生ができないと心得るならば、その人は本願の救いにあずかることはできないであろう、という意味であります。「たゞし三心四修と申すことの候は」という三心とは、至誠心（まこととの心）、深心（深く自らの力のはかなさを知り、佛の本願の力強さを信ずる心）、回向發願心（一切の善根を誠の心をもつて廻向して極樂に生れようと願う心）の三つでありますし、四修とは念佛の稱えた方の四通りのきまりであります。信じて、いずれも概念であり理屈であり教義であります。信仰生活が反省される場合、こういう教義になるのであります。

すが、このような面倒な教義は、疑なく南無阿彌陀佛で往生できると信ずることのうちに含まれているというのであります。その次の句の「二尊のあわれみにはすれ」の二尊とは、釋尊と阿彌陀佛とでありまして、念佛による救済の教えを説いた人、釋尊と、その釋尊の口を通して自らの大慈悲を語らせた救済の佛、阿彌陀佛とであります。

なお上人の別の法語には次のような一句があります。

煩惱の薄き厚きをも顧みず、罪障の輕き重きをも論ぜず、心に往生せんと思ひて、口に南無阿彌陀佛と申して聲について決定往生の思ひをなすべし、その決定の心によりて、往生の業はすなはち定まるなり。不定と思へばやがて不定なり。一定と思へばやがて一定するなり。

さきの法語の中の、「たゞ極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思ひとりて」というのは、この法語の、「心に往生せんと思ひて、口に南無阿彌陀佛と申して、聲について決定往生の思ひをなすべし」というのと全く同じでありまして、この決定の心というのが淨土門における最も肝要なことからあります。人間は日頃わずかの知識や學問を誇つて、自らの知性の力によつて、兎や角と思ひし分別し判斷するもので、如來の大慈悲、本願の教

いについても、いろいろと憶測し付度し懷疑してこれを信じないのであります。あゝでもない、こうでもない、あちらへぶつかりこちらへ迷つて、一向に心が定まらないのです。決定の心がえられないのであります。これは人間が自らの知性に誇つて、これにばかり頼るために、却つて人間を不幸に陥しいれることになるので、知性的人間の悲劇であります。

そこで思い切つて、日常の考え方を捨て、常識の世界から一步外へ踏み出して、この世の一切の營みの相を、ありのまゝに素直に受け取つてはどうでしょうか。如來の本願とか大慈悲とかいうような大きな問題を、人間の知性という如き小さな物指しで測つたり割り切つたりしようとすることから無理が起きるのでから、そういうことを斷念してこの世のありのまゝの相に卒直に隨順してはどうでしょうか。これはなかなか容易なことではありません。一大決心が必要であります。決定の心が必要であります。しかし私どもは人生の重大な危機に遭遇するとか、身邊の不幸に出會うとかいう場合には、それが轉機となつて、常識や理性によつて狭く束縛された世界を越え出でて、ありのまゝの世界の前に立つのであります。信仰の道が開けたのであり

ます。このときこの世のすべての聲は如來の本願の響きでないものではなく、救済の導きでないものはないことに目覚めるのです。鳥の囀りも佛の説法でありましょう。誠に阿彌陀經に嚴かに説いてあるように、諸の美しい鳥が晝夜六時に和雅の聲を出すのは實はたゞの鳥ではない、如來が法音を宣流せしめようとして鳥に姿を變えて語り給うのである、ということになるでしょう。百花の繚亂として研を競うのはたゞの植物の世界の圖譜ではない、如來が美しい頬を綻ばせて大慈悲の微笑みをなし給うのである、と受け取られます。自然の世界も人の世も混然として一體となつて共同の生命に躍動しています。すべてが、美しい光に輝き、深い慈愛に満ちております。一木一草の末に至るまで如來の慈愛が溢れております。これが信仰の世界であつてこの新しい世界への眼が開けるならば、何もかも悉くを感じ謝し感激してこれを頂く心持ちになるのであります。およそ宗教的な生き方というのは、生命のない所に生命を見、光のないところに光を見出すことであります。私の知人に自動車の運轉手がありますが、この人は念佛信仰の深い人で、一日の運轉を終えて車を車庫に納める時には、丁寧に

それを掃除して注意深く機械を点検して、人に物を言うように一日働かしてもらつたお禮を述べて、家にかえるということですが、奥床しい信仰生活ではありませんか。法然上人のお言葉に、「法爾の道理ということあり、焰は空に上り水は下りさまに流る。菓子（果物のこと）の中に酸き物あり甘き物あり。これらは皆法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は……法爾の道理にて疑なし。」というのがあります。これは、衆生救済の本願は、水が上から下へ流れ、火が下から上へ燃え上るのと同様に、法爾の道理、即ちありのまゝの道理であるから、如來の救いがあるとかないとか迷い疑うことをやめて、すなおにこのありのまゝの道理を受け取るがよい、という教えであります。十七世紀のフランスの思想家、パスカルは、神を知ることゝ神を愛することゝは遙かに距離がある、言つておりますが、これも同じような事を神を愛するという言葉で表したので、人間的な知性の立場を超えなければ揺ぎない信仰の境地に至ることとは難しい、ということを教えたもので、彼れと此れと照し合せて考えると興味があります。「往生は不定と思えば不定なり、一定と思えば一定なり」という言葉には、一般

の知性に頼つて理屈通りに物を考える生き方を超えて、信仰の世界への眼を開け、という決断の必要が教えられています。

ところでこの初めの句の往生極樂とはどんなところでしようか。極樂はこの世ならぬ清く樂しきみ國であります。

それは古くから出過三界道しゅつふさんかいどう（欲界・色界・無色界の三界道を出過している）といつて、欲望の世界、物質の世界、觀念の世界の三つを超越した世界であるといわれています。

その意味は、極樂は人間の欲望が作り上げた世界でもなくこの現實界をそのまゝ西の方に延長してそこで見出される物質的な世界でもなく、また單なる人間の思想や觀念が作り上げた空想の世界でもないということです。もし、樂しきみ國ということが、この世では満たされない人間の感覺的な欲望の満たされる所という意味であつて、そこへ行けば食べたい物が食べられ、着たい着物が着られ、立派な家に住まわれるというならば、この現實よりも更に醜い欲望の追求が行われるでありましょう。また極樂が、この現實の世界のどこか西の方の、この世界と同じ次元にある物質的な國であるとすれば、それは望遠鏡によつて觀察された

り、地理學的に測定されたりして、その存在が科學的に證明されないはずはないでしょう。もしまたその國が、いわゆる知識人とか教養ある人たちがよく批評するように、空想にすぎないもの、思想や觀念が作り上げた妄想にすぎないものとすれば、知識の發達とともに、極樂は唇氣樓しんきろうの如く消え去つてしまふでしょう。ですからこのみ國は欲望の満される國でもない、この世界の續きにある地理學的な國でもない、また美的空想が描いた虚構の國でもないのです。それは信仰によつてのみ導かれる同であります。如來が本願力を以つて導きいざなつてくれる世界であります。人間の知性の計らいのすべてをすてゝ、如來の本願にすなおに隨順ずいじゆんして、如來のみ名を稱えるとき、導かれるみ國であります。

では次に本願とは何でしょう。佛の本願を説明することほど難しいことはありません。特に自然科學的な教養や哲學的或は社會科學的な教養の中に育つた青年諸君に、本願を説く位、困難な仕事はありますまい。しかし本願は淨土教信仰の根柢でありますので、これを納得なつとくしてもらえないことは、結局は信仰の世にそのものを納得してもらえない

いということになるでしょう。昨日もお話しましたように、無量壽經では本願は法藏菩薩ほうざうぼさつの物語として説かれております。阿彌陀如來がまだ修行の位にあつて法藏菩薩といわれた時、理想の國土を建設して衆生を救いたいという誓願を立てられた。誓願とは佛國土を成就じょうじゆするための條件でありまして、それに四十八あります。その中でも第十八願が最も中心となるので、それによりますと、人生苦に悩む衆生が心から私の國に生れたいと願つて私の名(阿彌陀佛)を呼ぶならば、その人をこの國に導き救つてやろう、と堅く約束されたのであります。これは明らかに物語でありまして、一應は本願はこのような形式で表現されたのであります。これが科學や哲學の方面からつねにいろいろに批判される點で、彌陀の本願は釋尊の傳記が物語として形を變えて修飾しゆしよくされたのだなどいわれます。しかし本願の眞の意味はこうした物語の一々にあるわけではありません。本願とは大慈悲そのものである如來が、衆生を導き救わんがために、常に刻々に衆生に働きかけているこの現實をいうのであります。それがお經ではいろいろの表現形式をとつて述べられているというまであります。第十八願が

最も重んぜられるのは、本願の趣旨がこゝで最も簡潔に且つ明瞭に示されているからであります。宗教の世界は哲學の世界のように、論理や概念を重ねても表現することができません。また數學の眞理のように計算や數字や記號で表わすこともできません。また音樂の世界のように音で深い體驗を表わすこともできません。宗教はその境地を何によつて表わすかといへば、形像(かたち)によつて、表徵ひょうちゆう(シンボル)によつて表わすのであります。ですから極樂にいろいろな感覺かんかく的な形像が伴つて、美しい楽しい所として表現されていましたが、それがそのまま快樂の國ではなかつたように、本願の敘述じよじゆつにも様々な説話せつわ的な表現が伴います。それは宗教が表徵の世界である以上、一應はそのような方法により他に致し方がないのであります。そのことに氣ずかずして、あゝいう美しい極樂は實在しないとかするとか、本願は物語であるから信じられないとか、論議することは、知性の世界をそのまま信仰の世界へ持ち込むことにほかならないのであります。「疑なく往生するぞと思ひとりて申すほかには別の仔細しさい候わす」という知性を捨てる決斷がなければならぬのであります。(つゞく)

幽 靈 芝 居

梅 津 和 夫



毎年盛夏になる
と涼み芝居と稱し
て、幽霊の出る狂
言が上演されてゐ
ますが、歌舞伎な
らまだしも、新派
迄が時たま幽霊の
力を借りて興行し
てゐるのをみます
と、まだまだ、文
明の世の中にも幽
霊の効力は残つて
ゐるとみなければ
なりません。

幽霊が舞臺に現
はれたのは、歌舞
伎創まつて以來の
ことで、すでに出
霊のお國の芝居に
も、名古屋山三の
幽霊が出てゐる位
です。しかし初期
のものには、皆不

思議と物凄く不氣味な幽霊は出てこなかつた
様です。そこには後世のごとく、幽霊を舞臺
へ出して脅かさうと言ふ氣持は少しもなくて
むしろ幽霊の美しさを感じさせる演出の方法
をとつてゐたのです。今考へると一寸合點が
ゆきませんが、當時の見物は何でも綺麗な事
を喜んで、怖い感じや不氣味な思ひをするの
は、却つてあまり好まなかつたらしいので
す。

ところが今から約百五十年前、俗に言ふ爛
熟期がやつて來たのです。よく「天道様と米
の飯は附いて廻る。」と言はれましたが、それ
は今とは比べものにならない程平和な、まる
で晝寝した後の様な、弛れた怠惰な時代だつ
たのです。人々は單調な世相の中で、何か特
別な刺激を求めてゐたのです。だから歌舞伎
の作者が、そのチャンスを見逃してゐる許は
ありませんでした。そして濃厚な濡れ事を見
せつけたり、血だらけの仇討狂言を出したり
又、思ひ切つた滑稽な筋で笑はせたり、あり
とあらゆる奥の手を使つて、人々の刺激を満
足させていつたのです。そして怪談狂言——
つまり幽霊の怖さで見物をおびやかすと言ふ

工夫も、その中の一つとして現はれたので
す。しかしこれだけは、あまり寒い時分は向
きませんから、暑い夏の狂言に應用されてい
つたので、今でも「四谷怪談」がお盆を目當
てに上演されるのは、昔から大體變らない一
つのしきたりの様になつてゐるのです。

おほよそ怪談狂言である以上、見物が怖が
らなければ意味がありません。それは悲劇を
觀せて、見物が泣かなければ價值がないのと
同じです。文化文政の江戸の市民は、幽霊の
存在を半ば信じてゐましたし、夜の灯りも乏
しく、座敷の隅とか、軒の下に、何とはなし
に「ものゝけ」の潜んでゐる實感を、もつて
ゐたにちがひなく、又、彼等を根強く支配し
てゐた因果應報の思想は、怨恨を抱いて死ん
でいつた者が、何らかの形で報復すると言ふ
心理状態を與へてゐたのでせう。だから「四
谷怪談」も、決してあり得ない話ではなく、
あの時代の生活の一駒として、大南北が寫生
的に描いた、寫實劇としての貴重な一面をも
つてゐるとみても、差支えないと言へませ
う。

しかし今日の看客に、その様な氣分をもつ

て見ることは、無理な要求と言はなければな
りません。ネオンの點滅する街の片隅から、
お岩の幽霊を想像することは、滑稽以外の何
ものでもありません。むしろそれは、遠い昔
の夢物語であるのです。だからこれから、
氣分劇的な性格に重きを置くことは期待出來
ず、けれん、一方で行く以外はないでせう。

今でも怪談劇が看客に歡迎されてゐるのは
實にそう言つた氣分とか凄味よりも、それに
伴ふ仕掛け物のトリックや、附隨した早替
りのけれんにあつたのです。「四谷怪談」が有
名になつた一つの原因も、實は隠亡堀の戸板
返しの仕掛けが評判になり、今に残つたと言
はれる位ですから、怪談劇の眼目が、いかに
そこにあつたかゞ解かります。「開けずに入
る格子戸」「佛壇に消へること」「幽霊の宙吊
り」「本水の使用」「抜ける髪の毛」「提灯拔
け」「幽霊が骸骨に碎ける」等々、その仕掛け
は非常な苦心をし、工夫されてゐるのが解か
ります。

例へば「四谷怪談」でみせる、獨吟での
「髪すき」の間、戸板返しの手際、更に幕切
に行ふ早替り等は、見物がその演出と仕掛け

を、充分楽しめる様に出てゐるのです。お
化けなどは怖くないと威張る人でも、唄の文
句一杯に、手順よく髪をすいてみせる演技や
つい今しがた小平の顔をしてゐた役者が、美
しい女に替つて出て来る鮮やかさには、たと
へ様のない快感を覺えずにはいられないと思
ひます。

たしかに怨霊が出現するのは、超現實的な
解釋です。然し多くの怪談狂言の根柢をなす
描寫は、やはり寫實にあつたのです。その寫
實的な描寫は、作者の巧みな筆のまにまに浮
き出されながら、怪奇な要素と渾然一體をな
しつゝ、けれん、或は仕掛け物に眼を奪はせ
ながら、看客を妖しい世界へと導いていつた
のです。「いづれも大出來大當り、大評判にて
九月十五日迄興行」と『讀歌舞伎年代記』に
記されてゐるのも、この間の消息を物語つて
ゐるのです。

今もつて幽霊芝居が、「忠臣蔵」や「勸進帳」
と共に、歌舞伎のドル箱的存在になつてゐる
のも、こんなところに大きな魅力があるので
せう。

(大正大學國文學研究室)

(カットは勸三郎のお岩)

京都の盆行事

竹田 聽洲

お盆風景

年に一度地獄の釜の蓋の開く日が京都では八月八日から三日間、この間に東山は六波羅の近く、幾十體とも知れぬ大小様々の石地藏が冥土への通路を見守つて居る臨濟宗珍皇寺——といふ名は知らなくとも東山の六道サンといえ市民は固より近郷近在知らぬ者はない——の「六道の辻」へ家々の御

精霊サンの歸つて來られるのを人々は先を争つて迎えにゆく。往還には高野槇、ホーヅキ、蓮などの盆花店をはじめ多數の張店が櫛比する中を身動きも出來ぬ雑沓にもまれながら六道さんに詣つて經木トローバを書いて貰い、延々長蛇の列の後について鐘樓の迎鐘（一撞き十圓）を一つ撞いて來ないと家々の佛壇には御精霊サンがかえつて來られた事にならないのである。特に初日の賑いは物凄い許りで、當日市電も東山線には増發する位であるが、この六道サンの邊りは又清水焼の本場五條坂に近く、各釜元ではこの三日間にかぎり一年間に出來たキ

ッ物やハンパ物の投賣をするため、之が又一層の人氣をあふり、獨り市内のみならず山城丹波邊りからも多數の人が押かける。六道詣りを以て蓋をあけた京都の盆は、

つゝいて千本圓魔堂、法然院、壬生寺の迎火、清水寺の千日詣り等を経て十日前後から各宿坊の棚經が始まるが、寺の多いこの土地では檀那寺の外に二ヶ寺三ヶ寺の信徒となり棚經だけはその全部のお寺から詣つて貰う家々の多いのも京都の一特色であるかもしれない。然し京の盆行事の壓巻は何といつても八月十六日の夜の大文字の送り火を推さねばならぬ。ふとん着て寝たる姿の東山の北端、連る山波がやがて比叡山の裾に移る邊りの如意ヶ嶽の中腹に、日の暮れ終つた八時頃を期して一齊に、もえ上る「大」の字形の火文字、時間にして僅か十五分許りであるが、市内の何處からも望見され、殊に賀茂の河原や三條四條の橋の欄干にもたれ川風に打たれ乍らの眺望は一際印象的で、盆の終末をつぐる送火であり乍ら、情趣は正にそのクライマックスに達す

る。四季を通じて様々に繰りひろげられる京の雅びの装ひの中にあつても、それは最も京都らしい風情の煮詰められたものであるといつても過言ではない。簀入りでさなきだに入出の多い夜の街もこの時は夕涼みをかねた見物人で更に一層の雑沓を加える。之は如意ヶ嶽の山麓浄土寺の檀家で春の頃から燃料の松を切つて乾燥させ盆には一週間前から精進し、山腹に捆られた火床とよばれる七十五の穴にその薪を運搬して浄土寺住職の讀經につゞいて火打石をもつて一時に點火するのであるが、この行事は大體慶長年間から始まつたらしく、以前は宮中の小御所で、庭の池に映ずる火影を愛でられたものであつた。その火床を通ぬる「大」字の第一畫四十間第二畫八十間第三畫六十八間、「大」は佛語に所謂人體四大の意を寓し、人體にひそむ七十五法の煩惱を焼き盡くすものといはれ盆の送り火といふよりも情緒横溢した夏の夜の火祭りといふにふさわしい。

むしあつかつた京都も廿日をすぎると朝

夕はめつきり涼しくなり街々には六齋念佛の鐘の音がきこえ、やがて八月廿三日、子供達には忘れる事の出来ない地藏盆がやつてくると共に人々は京の周邊六所に祀られた六地藏廻りに行くのである。そして半月にわたつた盆も漸く暮切れとなる。六齋念佛は平安朝末の空也上人、胸に鉦をかけ念佛誦をしながら市中を勧進して歩いたこの市聖イチセイに始るといはれ、それが特に月の六齊日（八・十四・十五・廿三・廿九・卅）に行はれた處からこの名が起つたとされるが、可成の修練と技術を要するので今では特定の地域にのみ傳承されその日も區々となつて居る。中で最も有名なものとして今も多數の群衆を集めるのは吉祥院天満宮の吉祥院奉納六齊太鼓であらう。八月廿五日の夕刻から地元の青年達によつて行はれるが千年に近い歴史をもつといはれ近年無形文化財に指定されたと聞く。古き傳説といへば小野篁が平安朝の仁壽二年一木から六體の地藏を造り洛南大善寺に安置して六地藏と稱えた事から地藏盆が起り、後ち平清

盛がその像を洛中洛外六所に分置してより六地藏廻りが始まつたといはれる。所謂六地頭は四宮の徳林庵、木幡の大善寺、竹田の淨善寺、桂の地藏堂、常盤の源光庵、鞍馬口の上善寺が之で、廿六日の拂曉から善男善女の群が絡繹としてこれらの六地藏廻りを行ふ。殊にその年不幸のあつた家は必ず巡拜あるものとされて居る。それが特に六地藏であるのは「六道能化の地藏」から由來したに相違ないが、ともかく地藏は始と終を取り結んで京都の盆には最も因縁の深い御方であつた。八月廿三日になると街の辻や露地の奥の小祠から町内の年番宿にお出ましになり、西瓜、黃瓜、赤芋、菓子、ぶどう、梨など子供の好きそうなお供物が山の様に積まれた前で惡童共が集り、鐘を叩いてオットメしたり百萬遍の大數珠をくつたり、御供物の山分けがすむまで、如何なる大人もよせつけない。曰く子育て地藏、曰く子守地藏、曰く安産地藏など、かいた紅提灯がいくつも街頭にかけられた中で、その祭の管理が全く子供の手に委ねられて

居る京の地藏盆の風景位は、えましいものはあるまい。(佛教大學講師)

兵庫縣港村

川原の精霊送り

我部落は五十戸ですが、數十年前から七月一日に、午後一時から婦人總出を以つて、全墓地の草刈を行います。其の草は約九十バくらいあり、草刈が終ると一場所に持運び、入札を以つて高價の人に賣り、其の金は婦人會の入費に使用します。最高二百圓くらいになります。十一日頃から個人個人の墓地を掃除にかゝり、十三日から墓参り佛壇供物して祀ります。十六日は大セガキで寺参り、其の朝精霊送りに、川原に花供物を持ち線香を立て、昨年の盆から本年の盆迄に建た塔婆を持ち川原で焼きます。シヨゴならして念佛を唱え、家内中が参り送ることになつています。其の時檀那寺の和尚も参りおセガキを讀み回向しま

す。(淨徳寺住職 西大陸)

秦野の辻

神奈川縣中郡秦野では七月(又は月遅れで八月)の十二日夕又は十三日の朝、各戸の前に川砂を盛り上げて、高さ一尺内外の四角な壇を造る。周圍には細い女竹を蒸籠組のやうに重ね四隅に竹を立て、これを押へて砂の崩れを防ぐ。この壇の側に斜めの階段を設ける。四隅の竹筒には櫛や花を立て、壇上には芋とか蓮の葉の上に、茄子をあられに刻んだのをのせたり、紙の蓮化を挿したり、線香を立てたりする。これは「辻」とよばれるが町の辻に元來設けられたものであらう。先づ亡霊がこゝに到着してから屋内に入るといふ。(岡村木村幸夫)

宮津灣の燈籠流し

二度と來るまい丹後の宮津と歌われた裏日本天橋立を控えた宮津の町は、八月十六日には盛大に燈籠流しを行います。新盆の家は、船形の大きなものに満船のローソクを點じたものを沖へ持つていつて流し、其他各家々及び町の方から多數の燈籠を流します。恰も宮津灣は内海で波靜かにして燈明がいつまでもく消えず、ひつきりなしに打上げる花火と相映じまことに美しいものがあります。(宮津 徳田方子)

會盆の國湖

亮 諦 田 牧

真中にデシと鎮座した琵琶湖が滋賀縣内の交通を極めて不便にしているため、湖東

湖西、湖南、湖北の各地では著しく習俗を異にしている。生活の中から省くことのできない八月の行事となつてゐる「お盆」も縣内各地でそれ／＼のしきたりもあるもので、一概に述べることもできないが、今は特に野洲郡を中心にお盆の行事を記したい。八月七日に「墓参り」がある。勿論その二三日前には小學生が團體で墓地(寺墓)の清掃をする。遺骸を葬る(捨てる)三昧と、寺の境内にある所謂淨め墓との兩墓制が此のあたりの習俗であるが、お盆の墓参りはもとより寺墓である。朝七時頃から必ず戸主が家族をつれて先ず墓前に花、香を捧げ和尚に讀經を願ひ、終つて本尊前で更にもう一度先祖代々の回向をして貰う。正午頃には其の寺の總檀中が墓参りを終えるのであるから相當な混雑さである。十三日はお精霊さまを迎えるのに忙しい。佛壇をすつかりお掃除し、お盆にゆかりの品々が供養される。家の内外も綺麗に掃き清められる。たそがれ時になると、戸主が毎年の例で其の家にとつて定められた、砂を盛つ

て目印とした所へをからの祭明に火をつけ、て家までお導きする。それがすむと家内中集つて念佛の鉦をたゞき、先祖代々の靈にゆつくり我が家に泊つて頂くこととなる。村中のあちこちでとり／＼な鉦の音を聞く、もはやそれだけで何かしら先祖の靈をまつるといふ深い宗教的敬虔のさなかにあることを覚える。十四日は廻經である。數多い檀家を一、二日で廻るのであるから、和尚の誦經も至極簡單であるが寺門維持に特に責任を持つてゐる總代、親代理(住職の親代り)となつて世話をする役)の佛壇では稍丁寧におつとめして報恩のしるしとする。其の頃總代一同は寺に集つて明日の盆施餓鬼の準備をしている。十五日はこれも早朝から施餓鬼法要が勤まる。(甲賀地方では特に盛大で朝七時頃から夕方おそくまで勤める寺もある。)去年の盆以後の新亡の精霊を慰めるため其の家から盆施餓鬼を依頼する。土地によつては親戚一同がそれ／＼新佛の施餓鬼を頼む、それに對して受けた方では其のお禮に又其の家先祖代々の施餓

鬼を寺に頼む。かくして餘りにも哀れなため無意味な喧騒の裡に本來の意義を失つた施餓鬼が営まれる場合も起り得るのである。封建色の濃い村落ではせめて法事に、施餓鬼にかこつけて、他に嫁いだ可愛い娘にひまを買つてやる慈愛深い(?)母親もある。十六日晚にはお精霊さまに歸つて頂く。清い流れの小溝のほとりにいろ／＼なお供へものを持つて送るのである。十七日には三昧の大掃除、溜木の茂つた小徑も綺麗に散髪された子供の頭の様にすつぱりとなる。此の頃から地藏盆を終へる二十五、六日頃までが一年中で農家の最も太平樂の時で、夜遅くまでこゝかしこで江州音頭による盆踊りが行はれて、亡き先祖の人々を弔つた後の心のゆたかさをしめ／＼味うのである。

(東方文化研究所員)

原稿募集

地方色豊かな佛教年中行事

—四百字、十枚以内—

思いつくまゝに



武田 泰 淳

— 作家 —

私の父は宗教大學といつていた時分からこの大學に務めさせて戴いて居りました。

私が子供の頃、父に連れられて大學の記念祭に来て、おでんを食べたことをおぼえて居ります。これから少し思いつくまゝに話してみたいと思います。私が書くものは私の素性とちがふと思つて居られるかもしれませんが。この前も、早稲田で講演をたのまれた時、向うから「彼情と頽廢」と云う題を出して來ました。私が恐らく頽廢のことに就いてなら得意と考へたのでしよう。しかし、私はむしろ抒情の方が得意なのであります。

今日は中國に就いて話さなければならぬ

いのですが、戦後余り中國のものを讀んでいません。大學は東大の中國文學科に入りました。その當時はさしたる考へもなかつたのです。たゞ國文や英文は優秀な先輩がいるからやつても駄目だ、と渡邊海旭先生に云はれたのが、中國文學を選んだ原因になつてゐるの

でしよう。その頃は、中國文學は無試験だったので、私は高校の頃から角帽をかぶつていました。しかし大學は三ヶ月で幸か不幸かやめてしまつたのです。父の命で頭をかり増上寺で加行をやつておりますから、これでも坊さんです。兵隊は輜重上等兵でしたが、坊さんは二階級特進でした。中國文學會を作つた時は竹田先生（元文理科大学教授）は新しい

方針や新しい方法でやつて魯迅などをやつて居りました。何しろ三ヶ月でやめたので、残念なことに私は二三回しか聞きませんでした。

中國文學會をやる時、先輩から民國としたらと云はれたが、彼等自身がそう云つてゐるのだから、それでいゝだろうと云うことになり、その役目は橋渡しをすることでした。その頃は、危かしい橋のように見える時もあり丈夫な橋に見える時もあり、何等かの橋渡しをやつたのです。向うの人が來た時にはその人達を招待して話を聞き或は質問したりしました。

最初に來た人は、周作人で魯迅の弟でした。今中共で漢奸（戦犯）として牢に入つています。その時は佐藤春夫さんや島崎藤村さんなどが來ていましたが、私は机に座つて受付をしていました。料理が運ばれて來て部屋に入つて座ると、丁度前に藤村さんがいました。その時彼は古風な着物を着て袴をはいて私に料理を「どうぞ〜」とすすめられた。どうも中國の留學生と間違へられたらしいのです。

この人は獨立運動をやつていた時、亡命して來たのですが私はそう云うことには無頓着でその女の人に日本語を教へました。その人は、まえに女の兵隊にもなつた人で、物にこだわらず、疊の上であぐらをかき、話をする時などは、つばをばつばとはきつけます。當時滿州の皇帝が來朝して中國人は警戒されていました。中國人の目からは滿州は、にくらしかつたのです。その二つの理由でこの人はつかまつてしまいました。私もその一時間前につかまりました。當時はつかまることは普通のことです。一つも驚かず、四十日ばかり檻禁されたのです。警官が彼女の部屋を見たら、お金を個人の使い量以上に持つていたので、皇帝暗殺の軍資金であろうと云うことにされてしまつた次第です。中國人は銀行を信用しないから何時も現金を持つていたので何でもないことなのです。私の所にも南洋の椰子の實があつたのを爆弾と間違へられました。

私は皆さんのようではなく、坊ちゃんでも何とも知らなかつた。いま活躍している竹内好氏は私の友人ですが、私より二つ上で、若い頃

てくれたことはありませんでした。最近私の「風媒花」を批判していますが、そこで素という大衆作家は、ちよつともエロ的ではなくそれを書いている泰淳の書きぶりは、誠にエロ的であると云つてゐる。このように相手をつつびどくやつつけることは非常にいいことです。やろうと云うだけの根氣があればどんなにやられても續けられるものです。こうした友達を持つたことは、幸福であつたと云えませう。

私は別に作家になろうとは思つて居らず、學者になろうと思つて居りましたが、どうも大學三ヶ月では具合が悪いので、相手を信用させるため亂讀致しました。その中で氣に入つた本があつた。それは史記でした。私はその頃輻重特務二等卒で（昭和十二年）中國文學をやつてゐる者が、中國人を殺しに行くのだからまことに悲哀そのものでしたが、又反面、中國を見物に行くと言ふ喜びもあつた。その奇妙な心理状態は兵隊にならなければわからないものです。日本人は半世紀間中國人に對して實に大きな罪を犯した。戦争中も戦

つてしまつた。それを題材にして小説を書いてたがそれは「審判」と云う小説です。それはすなおで優秀なインテリイの青年が、戦争にかり出されたその青年の幼年時代は、非常に女らしかつたので、男らしくするために母が空氣銃を買つてやつた。或時ガマ蛙を射たうと思つて腹にねらいをつけたが仲々打てない。その時引金をちよつと引きさえすればいいのじゃないか。蛙を射つのではなく、引金をちよつと引くだけだと考へた。

その青年が中國のある農村に行つた時殆んどの者は逃げていながつたが、年老いたぢいさん婆さんだけが置いてけぼりをされて居た。どうせこのまゝにして置いても死んでしまふ。そこで彼は銃を取上げてねらいをつけた。ぢいさんは盲、婆さんはつんぽであつたがその中空氣銃でガマをねらつた時の心理状態になつて引金を引いた。初めにぢいさんが倒れた。それを知つてゐるものは兵站伍長と婆さんと本人としか知らない。

間もなく伍長は戦病死し、婆さんも死に、知つてゐるのは自分一人になつてしまつた。

彼には戀人があつたが或事件によつてそのことを告白せざるを得なくなり、彼女と別れてクリーの間に入つてしまつた。これがそのあらすじです。こうした戦争から受けた矛盾は

矛盾をはらんでいた。敘情的な一本線に繋るものも見えますがその様な線を断ち切る空漠なものを見ます。

最後にもう一つ中國を研究しても、あくまでも我々は日本人であると言う事、中國人が外國を接收した場合を見ればよくわかるだろうと思います。自分に都合のよいものしか彼等は取らない、日本は明治時代世界に出なければならなかつたので無理に無理を重ねている、永井荷風、谷崎潤一郎等でも何時もそう

言つてゐる。自分が東洋で一番強くなる爲に迷惑を掛けてゐる恥しさと西洋に遅れをとつてゐる恥しさととの二重の恥しさ、日本の文化はその逆手を行く皮肉な文化となつた。しかし今や日本は無理をする恥しさは消え去つてしまつた。苦しいが恥しさが無いのであります。従つて中國を研究する場合にも、素直な

私は終戦を上海で迎えて自分一人に日本國民の一人としてではなく個人として世界の審判に解剖分析される様な感じを持つた、俎板の上にのつて四つにも五つにも切られた様に思つた。現在の所、私は中國を多少とも研究して中國の文化を學んだ事を有難いと思つてゐます。英文學にもそれはあるでせうが、中國文學の場合は日常の事であり日常の問題に直面させてくれます。如何に鈍感であつても自分はと言う恰好で立つてゐるかを見せてくれます、少なくとも中國を對象にして何かやらうとする人間は悩み、混沌、大いなる空間に佇んでゐる、自分を反省させてくれる、私は共產主義者でも中國人でもない、皆さんと殆んど立場、境遇を同じくする日本人です

例えて言えば座標のX Yとの關係がうまく行かないと非常な不幸に陥る。佛教をやられた皆さんは自分の感じたり神經なりに中國の感じや受け取つてゐるだらうと思ひます。

彼は戀人があつたが或事件によつてそのことを告白せざるを得なくなり、彼女と別れてクリーの間に入つてしまつた。これがそのあらすじです。こうした戦争から受けた矛盾は自分自身の内心を見つめて白か黒かと決定して、自分のものとしてやらなければならぬ。司馬遷はなぜ私に興味があるかと云うと彼は、腐刑と云つて、くさらずか、何かして生殖器を切られ、男でなくされた。士人として生きてゐるのはつらい司馬遷が、この恥を忍んで何故、生きのこつたか、それは血の通う者としての意氣を認めて生きていたのであるが、彼の人間の見方が特殊であつて、帝王も反逆者も皆平等に見たのであつて、自分がこう言う状態で生きるのは恥しい。しからば奴等はどんな事をして生きてゐるのか、すべて同じ人間ではないか。彼の歴史はこのように空間的に考える。大体日本の歴史は縦の繋りを見ている。それが日本文化のもののあわれをかもしれない。それを、史記は断ち切つてゐる。戦争中に讀んでいて私は氣持が悪くなかつた。ここに書かれてゐるのは冷め

た、無情である。しかし本書である。

（大正大學圖書館、東京）

古 寺 訪 問

釜 寺

と

厨 子 王 丸

東京杉並の東運寺、釜寺本堂に安置し奉る身代り地藏菩薩の由來をたづねると、今より昔四百年世は血なまぐさい戦國時代、あの有名な厨子王丸安壽姫の肌身はなさず持つていた守り本尊であつた小さい地藏菩薩の木像こそ釜寺のお地藏さんである。

かの厨子王丸と姉の安壽姫が人買いにかどわかされて、母や侍女とわかれくになつて、丹後の由良港浦の悪るもの山椒太夫という豪族の家に賣られ、晝は野ら仕事や山仕事に追立てられて夜になると二人でいだき合つては、泣きぐらし、もう死んでしまおうとしたこともたびくあつた。或る日、厨子王丸は大釜の熱湯の中にほうりこまれて、煮殺されようとした。その時いずこともなく、一人の

身を助け姿を消した。それは日夜はなみをはなさなかつた御守りの地藏さんであつた。その他色々さんくくな目にあつて、殺されそうになつても、いつも、この地藏さんに命を助けられて來た。

それがふしぎな縁によつて、江戸時代承應年中に關西備前國より高僧一安上人と申す方が、この地藏尊像を背負つてはるく關東に行脚して來て、たま／＼當所大宮八幡宮社に足をとどめ、しばらくの參籠をして、この地藏尊像を奉安し日々供養しておきたらなかつた。當時大宮八幡宮社は神佛混合で大宮寺と稱し、近縣に稀れた大寺であつた。一安上人はこの地藏菩薩の靈驗あらたかなくさ／＼の物語りを人々に告げたところ、忽ち近縣近在にその名はひろまり、參詣する人、日に日に加わつて利益を受ける人の信仰と禮拜は世の語たりぐさとなつた。

その中、この方南にも信者日増しにふえ、中にも方南の大地主鈴木伊兵衛という者あつて信仰心ふかく、大宮寺に日參してこの身代り地藏菩薩の功德に浴して大に喜んでいたが、遂に自分の家屋敷一切を供養して、これを寺に造りかえ、こゝにその地藏菩薩の尊像

を安置した。それから釜寺のことはしめしめである。右に述べた因縁から、釜の屋上に大釜をのせて象徴とした所より、釜寺と呼ばれたのである。爾來三百有餘年一日の如く今日につたわり、武藏方南、釜寺の名は江戸郊外の名所の一つとなつた。少くも北は田無青梅より南は馬込六郷邊にいたるまで知らぬ人とはなく、明治の初年までは、毎月二十三日、四日には豫日が行われ、門の内外にぼろ市がたつた程人々の參詣も多かつたのである。然るにその後住職に不徳の者出で寺の寶物等は失われ寺は荒れ、はてはいずこへか出奔してしまつたことがあつて、一時、寺は衰運に傾いたが信仰あつた方南の人々の護持によつて細々ながらうやくその形體をたもつて來た。

しかるに、大正十一年の東京入谷東運寺を合併し、本堂、庫裡、門、集會所等百坪以上の殿堂を新築しこゝに念佛山東運寺と改稱し、大村桂巖師を中興開山として釜寺は再び世に生き一層有名になり身代り地藏菩薩の御影のうつしや、御守りを頂きにくる人々もまた昔の如くなり、第二次世界大戰の際など、出征軍人やその他が毎日參詣し御守を頂くもの多く寺の前のバスの停留所は釜寺前と呼び、町も店などふえて大いにぎわうようになつた。

童話

『玉風號のみたままつり』



齋藤良光

「おい玉風うんと走るんだぞ、ソラッ。」
五月の空にビューツとむちの音がしたかと思ふと、

「バカバカバカ」

といさましいひずめの音がして、すーと牧

場のかたへ消えて行きました。

であり、友だちである愛馬の玉風號でした。
玉風號は、ことし三才になる雄馬の立派な馬です。

それは丁度一年ほど前のことです。

勝君の家は、お百姓さんですが、今まで馬

を飼つたことがなく、牛ばかりです。

「お父さん僕は馬の方がいいよ、馬を飼つておくれよ。」

と、せがむのでしたが、お父さんは

「だめだめ、馬は大變だぞ、飼うのが」

「ううん、大丈夫だよ、一生けんめい飼う

から、朝早くおきてまぐさだつて僕がかつ

てくるからお願いだからかつておくれよ。」

「じゃね、お前が何でもよいから學校で賞

められたら買つてやるよ。」

「それ本當、お父さん」

「本當だとも」

「よし、僕何だつて賞められるぞ」

それから勝君は一生けんめい勉強しまし

た。そして級でも一番になるんだとはりきつ

ています。

丁度そのころ新聞社主催で愛馬週間にちな

んで綴方の募集がありました。勝君の學校に

も通知があり、みんなも書いて応募するよう

にこの受持の先生「葛木先生」のお話を聞

いて、勝君はこごりして喜びました。友達

もはりきつて応募すると言つています。

しかし乍ら勝君の家には馬が居ません。牛

「何故家には馬がいないんだろう、こんな時家に馬が居たらなー、一番に書くんだがな。」

次郎君や武君の家には馬がいるんだもの、うらやましくてなりません。その日からの勝君は馬の事で頭は一ぱいです。夜もねむれないくらいに綴方のことを考えました。

それから二、三日して勝君は、ふと頭にうかんだものがあります。それはお父さんのお言葉でした。

「じゃね、お前が何でもよいから學校で賞められたら買つてやるよ。」

「これだ、このことだ、これを書こう、僕は馬がほしくてならないんだ、だから僕は一生けんめい勉強しているんだ、そうだ、これに決めた。」

勝君は、早速綴方用紙を買つて來ました。

今自分が思っているそのまゝを書いてみました。しかし、あまりうまくは書けません。

勝君は残念で／＼なりません。涙が出る程書けないのがくやしかった。何枚も／＼、書き直をしては又書き、書き直をしては又書きする中に、／＼切の日はだんだんせまつてきま

す。いよいよ明日は學校に提出しなければなりません。勝君はしかたなしに、今まで書いたのを清書して出しました。

どうせつまらないと思つていた勝君は、馬のいる次郎君や武君がうらやましくてなりません。

發表の日が來ました。

勝君は、どうせだめにきまつているから、別に氣にもしていませんでした。

その朝、お父さんが新聞を開いてみると、

この前の綴方の發表がしてあります。

一等、高山小學校六年、伊藤勝君

と、書いてあります。お父さんはびつくりして、

「おい勝、お前の綴方一等に當選しているぞ。」

「エッ、僕の綴方が、それ本當。」

「本當だよ、それ見てごらん。」

お父さんに新聞を見せて貰つて、勝君は、自分の目をうたがつたくらいに驚きました。

そして嬉しくてなりません。

「おい、勝、よく書いたね、一體どんなこと書いたんだい。」

「それだね、お父さん、僕の馬、馬がいないでしよう、だから僕、ほしくてたまらないことや、お父さんがこの前言つたでしよう。學校で何でもよいから賞められたら飼つてやると、だから僕は飼つてもらふために一生けんめい勉強しているんですと書いたんです。」

「それが當選したと言うわけだね。そうかそんなに前がほしいのなら一つ飼つてやるかな。」

「お父さん、本當ですか、嬉しいな。」

勝君はおどらんばかりに喜びました。

「お父さん、いつ飼つてくれるの。」

「そうね、もうすぐこの村のお祭りの時に牛馬市も開かれるだろう、その時飼つてやるよ。」

それから言うもの勝君は、毎日／＼その日の来るのをたのしみに待つていました。やがて村のお祭りがきて牛馬市が開かれました。

勝君はお父さんに連れられて牛馬市に行きました。たくさん牛や馬がいました。その中で一番元氣そう、強そうなのを勝君はみ

つけました。

それが玉風號だつたのです。

その玉風號がどうしたのか、この二ヶ月程前からだん／＼元氣がなくなり、獸醫さんに見てもらうと、陽けつかくと言ひ病氣で、とう／＼十日程前に死んでしまいました。

勝君のかなしみはどんなだつたでしょう。

玉風號のなきがらにとりすがつて泣きました。あれだけ欲しがつて飼つてもらつた玉風號だつたのに、朝も早起きして自分でまぐさかりに行つた勝君だつたのです。玉風號が可愛相で、可愛相でなりませんでした。

勝君は、今でも玉風號のことを思うと、胸が一ぱいになります。眼がしらがあつくなり大きなためいきが出てくるのでした。

「お父さん、今日はお盆の十六日とうろう流しの日ですね。」

「うん、そうだよ、お先祖様のみたまを送るためにとうろうを流すんだよ。」

「お父さん、玉風のみたまもきつと家に來たでしようね。」

「うん、玉風のみたまもきたとも、お前があんなに可愛がつていたのだから。」

「お父さん、とうろうは玉風の分も作つて流してやりましょうよ。」

「そのだね。」

勝君は別に大きなとうろうを一つつくりました。そしてそれには、ほかのと區別して赤い色紙をはり、「玉風號の精霊」と、墨ではつきりと書いてやりました。

やがて夜になりあたりが暗くなると、あちらからも、こちらからも、とうろうに火をともして濱邊に集つてまいます。お坊さんのおせがきの、おつとめがすむと、みんなは一世いに流しました。

暗い海の上をそれぞれにあかりをつけたとうろうは沖へ／＼と流れて行きます。

その中に玉風號のとうろうは一きわ目立つて赤く／＼輝き乍ら、流れて行くのをじつとみていた勝君は、今までのことが走馬とりの如く浮んでくるのでした。

綴方募集のことや、牛馬市のこと、玉風號を飼つてもらつた喜びや玉風號にのつて牧場をかけ廻つたことなどが……どこかで「ヒヒヒーン」と、ないていようとした気がしました。

赤いとうろうは、いつまでも／＼消えずに沖へ沖へと流れて行きました。

維持會員について

○本會も皆様の御後援により月々充實を致して参りまして、皆様と共に喜びと感謝に堪えない次第であります。

○維持會員の方々には特に御芳志頂き厚く御禮申し上げます。

○今回維持會費は年額壹千圓に改められました。從來の維持會費は普通會費の増額以前のものでありまして、會員諸氏の御熱心な御意見により、かく致しました。尙、普通會費は今まで通りです。

○從來の維持會費の方へは逐次精算書を差上ます故、それによつて御送金下さいます様御願ひ申し上げます。

○維持會員の御申込みを御待ちしております。追つて芳名誌上發表いたします。

◎私の寺のニュースを送ります
日曜學校及び毎月廿五日法話會
の外、洋裁、珠算週三回、英語
會話、書道、繪畫週一回とい
所で、近日保育園を開設した
思つております。いづれ又知
せます。(葉山、杉田義俊)

◎先日は御多忙中來訪激勵頂
感謝しております。私達永い間
の獄中生活ながら、皆様方の御
理解の裡に、この試練を通じ信
念を強固にしてゆく覺悟です、

我々の解放も尙曲折を豫想され
ます、今後共宜しく御願しま
す。(スガモブリズン田端正雄)

◎北海道方面の淨土宗開教事情
をそのうち投稿したく存じます
私達の老師白壽記念に當るので
其がすんで後執筆致します。尙
トラクト、パンフレット類見本
お送り下さい。(小樽・石川博應)
◎六月の新興宗教面白く拜見致
しました。月々の訪問先が樂し
みです。(大分・山崎とし子)

○どういふ因縁か近頃二ヶ月の間
に二組の佛前結婚の戒師をつとめ
ました、昨年は媒約人を二度、親
元になつた縁組が一度、娘の結婚
と合せて四度。いづれも佛縁淺か
らぬ人達でした。人生の首途に佛
教的信仰で結縁するのは何といつ
てもほがらかで楽しい事です。何
とかしてもつと佛前結婚を普及し
て、新婚夫婦が三歸や淨戒を受け
て人生のスタートをしたいものと
思います。(佐藤賢順)

○増上寺で、椎尾僧正の喜壽の祝
ひが盛大に行はれ、本派の人々も
交えて、和やかに老先生の健康が
祝福された。益々大きな力として
光を廣く與へられんことを祈つて
いる。

○六月七日、竹中氏宅では長兄鐵
哉氏の二十七回忌が行はれ、こゝ
でも、双方の大物連が集つて、和
やかに追善供養が行はれていた。
この頃の、合同の空氣と相俟つて

何と云ふいふものを感ぜずには居られなかつた。

○「關東は關東、關西は關西の性
格を持つてゐる。全國に讀者を持
つ雜誌淨土は、双方の性格を取り
入れることが必要だ。こんな點に
一臂の力となれば幸ひです。」と新
保氏から言つて來た。

○大正附屬高校では、創立五周年
記念の準備とかで、同窓生も交つ
て大にぎはひである。

○久方に武田泰淳氏が大正大學で
講演された。靜かに、ユーモアを
飛ばしつゝ、而も詳々と説かれる
當り、貫録充分。速記録を本誌に
頂くことゝした。齊藤氏の勞で
す。(安居)

○五月六日、宗務所講堂にて、松
濤誠廉先生の「行について」研究
發表會あり、會後、宗祖大遠忌の
計畫が相談された。

○週刊朝日六月十四日號によると
吉川英治氏があの新平家物語を書
き初めた動機は、壇ノ浦の後、勝
者の源氏方の陣營から幾多の人々
が法然上人の門へ投じた、なぜ勝
者がかゝる行爲をとつたかを書く
つもりだつたという。

○本誌はお盆號。八月號は讀物中
心で行きます。

○大分が新刊誌の發行より多量に
惠送下さる。厚く感謝致します。

○教學院では、今回、大野法道先
生を講師とし、毎週、増上寺に於
て大無量壽經の講讀會を開く事
なつた。第一回は六月廿三日であ
つた。(龍海)

誌代 會費半ヶ年二百圓、一
年四百圓(〒共)。毎號定價三
十圓(〒四圓、前金切次第清算
通知申上げます。確實便利な
振替を利用して下さい。

「淨土」 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿八年 六月廿五日印刷
昭和廿八年 七月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京千代田區神田保町三ノ
東京都港區芝公園五ノ一〇
電話 東京八二一八七番
電・芝(四三)一三二八

井川定慶師著
華頂文庫第一輯

法然上人

A六・六九頁
三十圓・送十圓

發行所

布教師會

(振替京都八一三番)

京都市東山區林下町知恩院内

念珠司

岩田圭秀商店

東京都豊島區巢鴨二ノ五〇

(とげぬき地後・染井墓地祓除入口)

浄土トラクト

B六、十六頁 價十圓送八圓
五十部以上 二割引
百部以上 一割引

浄土編集部編

信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知つておきたい「浄土」の
みおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・
其他・佛壇・香・珠数・木魚・おけさ・佛式作法一通
りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

一枚起請文

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、
かんでくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

浄土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上一、八圓
三百以上 一、五圓
送、五十部 每八圓

大野法道著

五重の話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を伝え、
どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説さ
れたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本とし
て大へんよろこばれています。